2

粟島（あわしま）（新潟県粟島浦村）

ゆっくり着実に、人と人との結び目づくりを

ゲストハウス「おむすびのいえ」オーナー／Iターン　青柳 花子

さあ行こう！ 粟島へ！

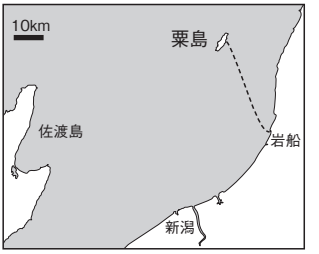
粟島は、新潟県の北部、日本海に浮かぶ小さな一島一村の島です。現在はおよそ人口三六〇人が支え合って生活しています。

島に移住して五年が過ぎようとしています。当初、島暮らしというと、自給自足でオーガニックに関心のある人たちだけが興味を持つものだという印象でした。自宅にいる時間より、カフェやショッピングモールにいる時間の方が長く、何かを自分でつくりあげるよりも、消費する立場だった私が離島に興味を持ったとは不思議なものです。

当時、二十歳代半ばの私は、これからの生き方、暮らし方に大きく悩んでいました。新潟県内の専門学校を卒業し、夢だった幼稚園の教諭となり、新潟市内の幼稚園に勤務をしたものの、三年で退職。それからは、いろいろなことに挑戦できると思っていましたが、退職したことで、人生のレールから外れたような恐怖も出てくるようになりました。自分から保育をとってみたら何が残るだろうと考えたこともありました。

それまでは、自分で何かを選択することもほとんどなく、人を真似ることで自分というものをつくっていたように感じます。自信がないくせに、強がってばかり。弱さをみせることが怖くて、自分を大きく見せ、必要以上に明るくふるまい、周囲の人たちに「元気な花ちゃん」を演じていました。

その頃、とある本屋さんに出会いました。そこで、大学を中退しようかと悩んでいる学生、日本一周の旅をしていた人や世界一周に行こうとしている人、仕事を辞めようか



粟島：村上市の沖合35kmにある面積9.86km²、周囲23.1kmの島。人口363人（平成30年2月現在）。かつては北前船の風待ち・潮待ち港として年間1,000隻もの船が寄港し、賑わいをみせた。明治22年に粟島浦村となり、以後、昭和・平成の大合併を経てなお1島1村を維持している。

悩んでいる社会人や、起業をしようとしている同世代の女性など、さまざまな人たちと知り合いになりました。同世代が同じように悩み、自分の意志で将来を切り拓いていこうとする姿が正直かっこ良く映りました。

私も、こんなふうに人が集まり、誰かの背中を押すことができる場所をつくりたいと思いました。もっと本来の自分をさらけだし、自分の力で未来を切り拓いてみたい、というエネルギーが湧いてきたことは今でも忘れられません。そういったタイミングで粟島のことがぽつりと脳裏に浮かびました。何もない環境でこそ、自分の暮らしというものに向き合えるのではないかと、どこかすがる思いもあったのかもしれません。こうして私は「粟島で暮らす未来の自分」を描き始めたのです。

ゲストハウス2階にある談話スペースにて。ゲストのみならず、島の人が集うことも多い。

粟島へ渡ったのが初めての一人旅でした。乗り馴れない電車や船。緊張の連続で、島に着く頃にはぐったりしたのを覚えています。島を散歩していた時に出会った、ひとりのおじさんに話しかけました。雑談をしていたときに「粟島は衣食住が贅沢だ」という話をしていて、こんな不便な場所に暮らしているのにその言葉は何を意味するのかと疑問に思ったものです。移住して五年が経った今ではその言葉の意味が何となくわかるような気がします。

ゲストハウスという場づくり

島に移住して二年間は、保育士として勤務しました。かたわらで朝と夜は初めて島に来たときに泊まった民宿「弥助」のボランティアも。なかなかハードなスケジュールでしたが、とても充実した日々でした。

こうした生活をしているうちに、島にはいろいろな経験をしている人が来ていることに気がつきます。私だけが彼らの話を聞くよりも、もっと多くの人と共有していきたいとの思いが大きくなっていた頃、東京の檜原村（ひのはらむら）で自分たちの手でゲストハウスをつくっているという雑誌の記事を読みました。すぐに休みを利用し、その宿のオープニングパーティーに参加しました。リノベーションに関わっている

人や地域の人たちが嬉しそうに交流している姿に、ざっくりとしていた「場」をつくりたいという思いは「粟島にゲストハウスをつくりたいんです！」と、パーティーで宣言するほど明確なものとなっていました。とはいえ、それからしばらくは、移住者の私に何から始められるのかと悩む日々が続きました。

幸運なことに、島では地方創生に関わるプロジェクトがいくつか始まろうとしていました。その一環で、若者同士が話し合う若者会議という場が設けられました。そこで、ゲストハウス設立の想いを島の方々に伝え、なんども話し合いを繰り返しながら理解してもらい、かたちにするにはどうしたら良いのかを考えていきました。

島での議論と葛藤の様子は、ＮＨＫの番組でも取り上げられ、事情を知った村上信用金庫の担当者さんから、ぜひ力になりたいというお声がけをいただきました。しかし、融資に必要となる事業計画書づくりも一苦労。保育の分野しか知らない私にとっては、そもそも事業計画書とはなんだろうという状態でした。数字の並んだ資料の作成に加えて保健所や消防署への申請など、じつにエベレストを登るかのような大きな壁を感じましたが、応援してくれる仲間がどんどん増え、クラウドファンディングにも挑戦することができました。ＳＮＳを通じて、粟島での生活や想いに共感してくださる一般の方や、友人のおかげで、一カ月で一五〇万円という目標を上回る資金の調達ができました。こうして、ゲストハウス「おむすびのいえ」は二〇一六年夏にオープンすることができました。

頼りになる粟島の両親

もちろん、粟島にもともと住んでいた方々の力なしには、ゲストハウスの開業にはこぎつけられませんでした。特にお世話になったのは、私が粟島の両親と呼ぶ、民宿「弥助」を営む脇川為雄さん（通称為（ため）さん）、茂子さん夫婦です。為さんは、昭和四四年に粟島で初めて民宿をひらいた、人生においても宿泊業においても大先輩。移住してから今までずっと見守ってくださっています。

ゲストハウスを始めたいという気持ちを伝えてからも、「宿を始めたことが成功ではない。成功とは生活の安定であり、借

敬老会で踊りを披露する島のお母さん方と一緒に。

金の返済が完了して、マネジメントがうまくいってこそ。粟島にしかできないことが必ずあるのだから、アイデアを出して、粟島をよりよくしていく存在であってほしい。それまでは粟島で頑張りなさい。私の娘なんだから」と応援してくれました。

どんなときでも厳しく、そして大きな優しさで見守ってくれる粟島の両親には感謝の気持ちでいっぱいです。まだ始まったばかりのゲストハウスですが、これからもずっと「おかえりなさい」が言えるように頑張りたいです。

粟島で結び目のような存在になる

私は本当に人に恵まれてきた人生だったと思っています。ゲストハウスの名前「おむすびのいえ」は、移住前から温めてきたものでした。おむすびは日本人のいわばソウルフードで、相手を思いながらこしらえる食べ物です。そして結ぶということばの通り、島と人、人と人など、粟島と世界を結ぶ、結び目のような存在になりたいという意味を込めています。

離島での起業は、なかなかに大変なことかもしれません。日本海に浮かぶ島ですので、波の高い冬はフェリーの欠航が続き、宿泊キャンセルも多くなります。イベントを開催したくても、天気や船の運航を心配して一歩すら踏み出せないこともあります。悩みは日々絶えませんし、失ったものもたくさんあります。あのとき、こうしていたらという想いは、生活のあらゆるところで現れては、自分を責めてしまうこともあります。

そんなときにおばあちゃんたちからの「そそどやりなさい」というおまじないのような言葉を思い浮かべるようになりました。そそどとは、島の方言でゆっくりという意味で、まるで「痛いの痛いの、飛んでいけ〜」というようなおまじないの言葉です。すぐに結果を求めず、時間をかけて納得のいく未来を築いていきたいです。■

青柳花子（あおやぎ はなこ）

1986年生まれ。新潟市出身。初めての一人旅をきっかけに、2013年に粟島へ移住。人と人との結び目となれるような「場」をつくりたいと、2016年に粟島ゲストハウス「おむすびのいえ」をオープン。島の暮らしを発信するFacebookページ「粟島文庫」を同年代の島人と共同管理している。